

## O1-042

## 小中学生の発達障がい児における環境と友人関係とに関する検討

高橋 一雅<sup>1</sup>、東中園 真也<sup>3</sup>、松重 武志<sup>2</sup>、長谷川 俊史<sup>2</sup><sup>1</sup>山口大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター、<sup>2</sup>山口大学大学院医学系研究科医学専攻 小児科学講座、<sup>3</sup>山口大学医学部医学科

## 【背景】

発達障を有する小中学生は、授業中の立ち歩き、教科学習の遅れ、集団行動からの逸脱などの、適応行動上の問題を認める。発達障得児のきょうだい関係や支援教育といった児の環境は適応行動と関連があると指摘されている。

## 【目的】

小中学生の発達障のうち、注意欠如・多動症(Attention Deficit/Hyperactivity Disorder; ADHD)と自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder; ASD)とにおいて、児の環境と友人関係との関連性について検討した。

## 【方法】

2016年11月8日から同年11月29日の期間、山口県内医療機関の小児外来に受診した発達障を有する小中学生の保護者に対して、子どもの環境と友人関係に関するアンケートを実施した。コントロールとして定型発達児の保護者にも実施した。アンケートでは、児の基本情報(性別、年齢、ADHD及びASD診断の有無)、環境(支援教育、きょうだいの有無、きょうだいとの親密さ)、友人関係に関する質問(15項目)の回答を得た。

## 【結果】

ADHDと診断された児をA群(n=26)、ASDと診断された児をB群(n=26)、コントロールをC群(n=54)とした。男児の人数と割合は、A群22人(84.6%)、B群18人(69.2%)、C群28人(51.9%)であった。年齢の中央値は、A群10歳、B群10歳、C群10.5歳であった。療育的支援を受けている児の人数と割合は、A群16人(61.5%)、B群22人(84.6%)、C群0人(0.0%)であった。友人関係に関する質問における、項目ごとのAまたはB群の得点とC群とで有意差を認めた。これら有意差を認めた項目において、A及びB群を児の基本情報(性別、年齢)および環境(支援教育、きょうだいの有無、きょうだいの親密さ)ごとに群分けをして群間比較又は単回帰直線の分散分析を行った。B群のうちきょうだいのいる群は、いない群に比し、「友だちとささいなことでもめる」項目の得点が有意に低かった(p=.0180)。A及びB群で児の基本情報や環境それぞれにおいて群分けをして群間比較又は単回帰直線の分散分析を行ったが、いずれにおいても有意差は認めなかった。

## 【考察】

ASD児において、きょうだいのある群がいない群に比し、友だちとささいなことでもめにくいという結果から、きょうだいの存在がASD児の友人関係に良い影響を与えていると考えられた。きょうだいの存在に関して焦点を当てた新しい療育の探求に繋がると考えられた。

## 【結語】

ASD児の友人関係に対してきょうだいの存在が良い影響を与えていると考えられた。

## O1-043

## 総合病院小児科における発達障がい児就学前親子支援グループの取り組み(1)

～概要～

橋本 直子、東 由佳、大嶽 由佳、小柴 ゆかり、梶 瑞佳、芦見 真知、中野 加奈子、太田 國隆

六甲アイランド甲南病院 小児科

## 【はじめに】

当院では2009年度から発達障がい児を対象とした2～3歳児対象の「いるかくらぶ」、3～4歳児対象の「くじらくらぶ」を実施している。次は学校生活に適応できることを目的とした5歳児対象のグループを立ち上げたいと考え、2011年度より就学前親子支援グループ「おひさまくらぶ」を実施している。「おひさまくらぶ」では机上課題やルール性のあるゲームを通して、話しを聞くこと、ルールを理解してみんなと楽しむこと、課題に集中すること、友達との関わり方を学ぶことなどを目的としている。

## 【対象および方法】

対象は5歳児で、参加人数は5～6人、母子分離で実施している。頻度は月2回、1回1時間、半年間で10回を1クールとして行っている。スタッフは、小児科医師、臨床心理士、言語聴覚士、作業療法士(不定期)、学生ボランティアが参加し、運筆のプリントや旗あげゲームなどのルールのある遊び、ラジオ体操などの課題を取り入れている。保護者に対しては、医師や臨床心理士による定期的な面接やグループ参加時の様子と今後の目標を毎回文書にして渡している。

## 【結果とまとめ】

子ども達の多くは聴覚的な理解が弱いため、絵カードでルールや手順を示したり、具体的に事例を示すなど見て理解しやすいようにしている。また課題に集中できるように必要な物以外は隠し、机上課題をする際には子どもの間に衝立を立てている。さらに正しい姿勢で椅子に座ることができるよう足台や補助具を使用し、座位が安定するように工夫している。このような環境調整を行った結果、座位が比較的安定し、落ち着いて先生の話が聞ける、ルールが理解できるようになってきたりするなど、子ども達の変化が見られるようになってきている。保護者からは、余裕を持って子どもにかかわることができた、どんなことに困っているのかが把握でき子どもの事が理解できるようになったなどの声が聞かれている。総合病院という特徴から、他職種が協力して支援にかかわることで保護者や子どもの変化がみられるようになったと考えられる。